

Alexander Vovin (2003) による古代日本語の散文： 参考文献法書を考える

板橋, 義三
九州大学留学生センター

<https://doi.org/10.15017/6796437>

出版情報：言語科学. 39, pp.105-114, 2004-02-28. 九州大学大学院言語文化研究院言語研究会
バージョン：
権利関係：



「Alexander Vovin (2003) による古代日本語の散文：参考文法書を考える」

キーワード：包括的、記述文法、不完全動詞、古代日本語、同源語彙

板橋義三（日本語部門・留学生センター）

はじめに

本書（「古代日本語の散文：参考文法書（英文）」）の原版は Alexander Vovin（現在ハワイ大学東洋学部教授）によって 1980 年代後半にロシア語でかかれたものであるが、著者自身が 1990 年にアメリカに移住したことやその他の急を要するプロジェクトなどにより 1996 年まで延期せざるを得なかったようである。その期間に著者の古代日本語に対する見解が非常に変わったため、内容を大幅に変更してここに著書として著したとしている。

本書は 8 章から成り、現代の生成文法などの言語学理論を基にして記述したのではなく、西洋の記述文法により記述したものであり、近代史以前の日本を研究する学徒、言語学者は勿論のこと、歴史学者、文学者を読者対象として書かれたものである。

本書の記述の特徴は、従来の国語学の文法記述の利点と従来の西洋での文法記述の利点を融合した点にあり、古代日本語の包括的な記述を目指して書かれた。従来、西洋における文法記述はほとんどが日本の伝統文法による一辺倒の記述に偏り、一貫性に欠けていたことの反省点と見られる。

評者としては、著者のこの目的は達成されていると考える。本書は入門的内容から非常に専門的な内容まで幅広い内容をもつ文法書なので、英語を研究するための使用言語としている言語学者、日本語学者、歴史学者、文学者など古典に直接関連を持つ研究者に推薦したい書である。

(1) 各章解説

本書は 10 世紀から 11 世紀にかけての、基本的には古代日本語の散文の参考文法書として書かれているが、古代日本語の詩のテキストとしてもその機能を果たすとしている。各章の品詞の下位分類と解説は国語学の伝統的な方法はいらず、現代言語学の記述方法によってなされている。

第一章は古代日本語の歴史的背景と文学的背景を述べている。歴史的背景として、奈良時代の長岡から平安時代の平安京（京都）への遷都の動機や理由などを具体的に挙げ、簡素に論じている。文学的背景としては平安時代の次の 3 つの形式の文献資料をあげている。仏教と孔子の古典に関する注釈、辞書、文学作品である。

第二章は古代日本語の散文における表記体系と音声・音韻体系の記述である。表記法について簡素に説明を加えた後、詳細な古代日本語の音韻体系を論述している。母音、子音、音韻規則、音韻変化に言及しているが、さまざまな理由からアクセント体系やプロソディは述べていない。

第三章は語彙体系について記述している。古代日本語の基礎語彙の一部を朝鮮語とアルタイ諸語との比較可能であることを仮定し、その同源語彙をあげている。その後、朝鮮語、中国、梵語からの借用語としてもものを取り上げ簡単に説明している。

第四章は名詞類(Nominals)についてである。語形成の観点から名詞(Nouns)、形容名詞(Adjectival Nouns)、数詞(Numerals)を取り扱っている。名詞は格と数によって、ある形容名詞は「一か」という標識によって、他のものは形態統語的機能によって、この範疇に入れられている。またこの範疇に接頭辞(尊敬接辞)と接尾辞(複数化接辞、格助詞、頻度助詞)を含め、名詞類との関連で言及されている。

代名詞は人称再帰代名詞、指示代名詞、集合代名詞、疑問代名詞の4つの下位項目からなっているとし、この4つの項目について詳しく説明している。

第五章はこの著書の中で最も長い章であるが、動詞(Verbs)に関する記述を扱っている。古代日本語の文法範疇としてモード、アスペクト、モダリティ、ヴォイス、進行、回想、伝聞、反復、述語化、敬語、丁寧、接辞が取り上げられ、それぞれについて説明がなされている。

次に動詞の活用による分類にはいり、伝統的な動詞分類について詳しく説明し、その記述方法の問題点を指摘し、Block以降の西洋文法記述に基づいた記述方法を採用している。まず不完全動詞 *n-* 'to be', *to* 'to say', *to* 'to be' と不完全形動詞 *ka-* 'to be such' が古代日本語に存在したと仮定し、論証している。従来の形容詞は動詞の下位区分とし、形動詞(Quality Verbs)として扱い、説明している。その点では従来の国語学の用言とその下位区分である形容詞に区分する考え方とそう異なったものではなく、伝統文法の分類の利点も評価し導入している。

動詞は形態論に基いて子音動詞、母音動詞、不規則動詞に分類し、それぞれの活用形式の動詞を網羅的に詳しく解説している。

動詞に連結する接辞(Affixes)、接頭辞(Prefix)と接尾辞(Suffixes)もこの章で扱っている。まずは動詞に接頭する動詞 *ye-*「得る」について例証した後、接頭辞 *uti-*, *kaki-/kai-*, *na-..so*, を取り上げ解説している。接尾辞については終助詞 *-u*, *-i*, *-si* を取り上げ、それぞれについて例証している。

活用させるための接尾辞としていろいろな接尾辞、文終止させることができない接尾辞、語終止させることができない接尾辞を例証している。

最後に補助動詞(Auxiliaries)について述べているが、敬語に関する補助動詞であり、尊敬、謙譲、丁寧などの敬語補助動詞を例証している。この他に補助動詞として確証、相互、方向、結果、補充尊敬動詞を取り上げ説明している。

第六章は副詞(Adverbs)に関しての記述である。ここでは形容名詞や不完全動詞、形動詞からの派生した副詞は既に記述してあるので、純粋に本来副詞として使われているもののみを取り上げている。

第七章は接続詞(Conjunctions)を扱っている。ここでも助詞として扱っているものや他の品詞から派生したものは除外し、本来接続詞としてのみ機能しているものを取り上げている。

第八章は助詞(Particles)についての記述である。ここではこれまでに伝統的な分類による助詞について述べるのではなく、焦点助詞、疑問助詞、禁止助詞、強調助詞、制限助詞という新しい枠組みにおける助詞のみを扱っている。

(2) 批評

まずは全体的な評価を述べると、従来西洋における日本語の古典文法書はすべてが伝統的な国語学の視点のみからの記述であったのが、この著書は西洋の言語学と伝統的な国語学の両面のよい点を取り入れ、その基本的枠組みは西洋の言語学の枠組みで押さえた。その記述範疇の広さもさることながら、つい最近得られた知見も満載し、体系的に把握し、新しい視座や範疇を取り入れ、より一貫性を持たせて、多くの例文で裏づけした点が最も評価されるべき点であろう。その点においてはこれまでに見られない画期的な著書といえるだろう。

しかしながら、下記のように詳細に渡って見ると、重大ではないかもしれないが、いくつかの問題が見える。次の 3 項目に従って順に見ていくことにする。(あ)全体の構成、バランス (い) 表記と用語説明 (う) 内容。

(あ) 全体の構成、バランス

構成についての批評を以下に述べる。第 2 章の「表記と音韻論」のところではその表題からも明らかなように、表記と音韻論が一体化しており、一般にはこれは異なった章で扱ってあるものであるが、表記と音韻論の関係は深いことを示し、その関係の重要性を喚起しているようである。これは少なくとも西洋では新しい試みである。

接辞に関する構成について従来接辞はそれのみの章を設けてまとめて取り扱っていたが、本書では名詞につくものは名詞の章で動詞につくものは動詞の章でそれぞれ別個に扱っている。全体的な構成のバランスや見易さ、そして統語レベルの問題となるにしてもその品詞は語彙レベルのものであることから考えると、名詞と動詞につく接辞は一つの章にまとめ、その中でそれぞれの下位

区分を考えた方がよいと思われる。

助詞に関する構成についても第 8 章に特定の章を立ててはいるが、この中には格助詞やその他の助詞が除外され、それらはそれぞれ別の章で論じられており、参考文法書としての機能を考えると、同じ範疇でくれるものを他の品詞と一緒にしてしまい、探す場所がまちまちでは煩雑になり、使いにくいであろう。この章では焦点助詞などこれまでとは異なる名称や範疇を導入していて、この新名称それ自体はそれにふさわしくわかりやすいと思われる。しかし、助詞は名詞そのものの範疇ではないので、助詞は「助詞」かまたはそれに類する章を立て、体系的に論じた方がよりわかりやすかったのではないかと思う。

(い) 表記と用語説明

誤字、脱字に関しては全般的にこのような非常に長い著書にしてはほとんど誤り（英語の表記分）がないのに驚く。但し、2, 3 指摘しておく。序章の 2 頁 14 行目の plusperfect は pluperfect の誤りであろう。また第 3 章の語彙では 23 頁 25 行目の PMT *mu(r/n)i の意味が付していない。また同章の 27 頁 27 行目の sauzok は syauzok- の誤りであろう。

本書では新しい用語が用いられているが、解説が必要であろう。例えば、adjectival nouns は形容動詞を指しているが、西洋では古典文法に関しては統一した名称がないため、また現代語とは特に異なる特徴を持つため、上記のような名称を使用している。また、defective verbs (172 頁), defective quality verb *ka-* (189 頁), preverbs (191 頁), sentence-non-final verbal suffixes (228 頁), word-non-final suffixes (271 頁), focus particles (419 頁), restrictive particles (445 頁) など、従来使用されていない多くの名称が散見されるので、これらについても説明を要するであろうし、それが従来の名称とのどのように異なり、その利点にも言及すべきであろう。さらには日本語対照語彙のようなものがあれば、さらに本書は理解しやすいであろう。

ここでは重要だと思われる上記の新用語を簡単に説明しておく。

Adjectival nouns (93 頁) は形容動詞ないしは形容詞。

defective verbs (172 頁) は活用不完全動詞、本来導入されていない概念である。活用が不完全な動詞、n-「ある」、t-「言う」などである。

defective quality verb 'ka-' (189 頁) は活用不完全形容詞「カー」である。

preverbs (191 頁) は前置動詞、「得(え)ー」であり、これ自体も本動詞としても機能するが、動詞と結合して複合可能動詞を形成する。

sentence-non-final verbal suffixes (228 頁) は文中以外の動詞接尾語「ーイ、ーク」などである。

word-non-final suffixes (271 頁) は語終止接尾語「-an/-az」(否定辞)、-

ite/te (て形) などである。

focus particles (419 頁) は焦点助詞とでも訳せるものであるが、取立て助詞「ハ」、強調助詞「モ、ゾ、ナム、コソ、」などである。

restrictive particles (445 頁) は「ダニ、サフエ、ノミ、バカリ」などの助詞をいう。

(う) 内容

個別的な内容に関する批評について以下にそれぞれ見ていく。まず第 3 章の日本語の起源と語源に関しては、日本語と朝鮮語、アルタイ諸語との基礎語彙の比較 (体の部位と機能; 自然と天文の 2 分野のみ) を試みている。本書の目的は語源と起源ではなく、確かにその意味では中心的な章ではないので、あまり大きな問題とはならないかもしれないが、それでもあまりに語彙選択が恣意的で比較する意味分野が狭すぎはしないか。その偏狭さゆえに日本語と朝鮮語、アルタイ諸語との、著者の主張する同系説を否定してしまう方向に働いてしまうのではあるまいか。

問題となる語彙比較は、古代日本語 OJ pone (日本祖語 PJ *pone (22 頁) PJ *poni-Ca と考えられる) 「骨」を中期朝鮮語 MK spye (朝鮮祖語 PK *s-pye[ni]) と比較しているが、これは子音構成 (語頭の s-は何であるかが不明なので果たしてこのように音節を切断できるのかが問題) から比較は現時点では不可能であると考ええる。また OJ fukufukusi 「肺」 (PJ *pukupukusi (22 頁)) を MK pwuhwa (PK *pwuk[V]pwuk- 「肺」) とは比較可能であるが、チュルク諸語 (チュワシ語 upke 「肺」) からチュルク祖語 PT *(h)okpe の復元とそれとの比較は可能ではない。また OJ *amey 「雨」 (22 頁) から PJ *(z)ama-Ci を復元しているが、語頭の (z)-は復元可能ではない。その復元形と朝鮮語 cang-ma の -ma 「長雨」「梅雨」とを比較しているが、これは cang の意味が「長い」という意味であるときにのみ蓋然性のある対応例と考え、実際この cang の意味としては「長い」である、cang と ma に分節できると考えてよいであろう。しかし、日本語と朝鮮語との間に OJ a- (または他の母音) [ama] と 0 (ゼロ) [ma] の規則的対応が見られないので、この比較は成立するとは考えにくい。

第 4 章の格助詞 (case markers) の中で「が」 (48~52 頁) と「の」 (53~57 頁) がそれぞれ possessive と genitive という機能をもつとして、両者の異なる点を結合の有無による形態論的なものに帰着させているが、意味・機能においてはその違いがないとのべている。しかし、「が」は所有者との被所有物との関係が不可分と考えるもの (譲渡不可能所有) である傾向があるのに対し、「の」はその傾向が薄い場合がほとんどである (Itabashi 1991)。

格助詞「を」 (65~70 頁) は基本的な機能は対格用法であるが、そのほかに

用法の特異性(66~69 頁)として動作動詞とともに用いられる擬似自動詞として定義しているマーチンの定義を引用している。この用法の特異性といわれるものは沿格用法(「を¹通って」「に²沿って」などの用法)などと呼ばれるものである。これは朝鮮語や中期モンゴル語にも存在し(Itabashi 1988)、対格助詞「を」の特殊な用法ではなく、認知言語学的観点からすると対格用法との共通性を見出すことができる派生的用法である(姚 2003)。姚(2003)では現代日本語のみを扱っているが、それは現代日本語のみならず平安朝の日本語にも適用できるものである。沿格助詞「を」は一見対格助詞「を」との関係がないように思われるが、意味的にはそれと共通した特徴を一部保持している。これはこの二つの助詞を典型的な他動詞から典型的な自動詞への連続体として認知する際にどのような種類の動詞とどのような助詞(同じ形態素をもつ対格助詞と沿格助詞)が共起するかを考えることで解決できる問題である。

典型的他動詞の基本条件、(つまり、対格用法「を」のうちの「さまを変へ、顔をもほのみせたまはず」(源氏夕顔)などに見られる対象への直接的影響があるもの)は(1)動作主と対象が存在する(2)対象に対して働きかけをし何らかの影響を与える(3)リアルタイムでおこる、の3点である。沿格助詞「を」は他動性の低い動詞とともに使用される助詞である。それは(1)動作主と対象(場所)が存在する、(2)対象(場所)に何らかの働きかけがあるが、状態変化をもたらすほどの働きかけはないが、その時点で動作主と対象(場所)が一体化し、その一体化した対象(場所)に言い及ぶ。この沿格助詞と共起する動詞の条件の(1)と(2)の対象に対して働きかけがあるという点までは対格助詞「を」と共起する典型的他動詞の基本条件と同じだが、(2)の「その働きかけは対象に状態変化を与えるほどのものではない」という点で異なる。その「働きかけ」が弱いという点で典型的な他動詞の条件(2)を欠くことになり、その共起動詞の特徴の欠落によって沿格助詞「を」は自動性の特徴をもつ動詞と共起するのであり、事実自動詞とともに使われている理由ともなる。逆にいうと、沿格助詞「を」は典型的な他動詞と共起せず、他動性を有した自動詞と共起する助詞であるといえる。これはその他の形態素「を」の用法に関してもいえるものである。

格助詞「より」(71~74 頁)は平安時代には形態的に最も多く使われたものである(「ゆり」「ゆ」「よ」の3異形態があった)が、基本的用法として「起点用法(時空とも)」と「比較用法」の2つの方法しかあげていない。しかし、奈良時代から継承してきたもうひとつの重要な用法、「沿格用法」が欠けている。例えば、水は石がちな中より湧きかへりいく(蜻蛉：上)など、例は数多く存在する。この欠落によって「より」が他の関連用法を有する格助詞(起点や経由点を表す「から」と「を」)の中においてどのような機能的・認知的位置を

占めるかを見出すことが不可能になる。即ち、「より」が「起点用法」を持つ、もう2つの格助詞、「から」と「を」との位置関係が不明確になる。さらにこれらの3つの格助詞の「起点用法」がどのように異なるのかも説明する必要があると考える。

動詞の章では日本の伝統文法による音節表記に基づいた形態論は文法分析の上で貢献するよりも有害なところが多いとして排除し、西洋言語学の構造分析の方法を採用している。この点は Block 以来の西洋での分析方法であり、伝統文法に対する視座の強化である。またこの章には Frellesvig(1999)が提唱した不完全動詞 *n-* ‘to be’, *to* ‘to say’, *to* ‘to be’ と不完全形動詞 *ka-* ‘to be such’ の動詞を導入している点も特記する事項であると考えられる。これについて伝統文法では従来このような動詞の存在は暗示されてはきたが、実際には明確に提示されてこなかった。しかしながら、その点は従来の問題点であるにしても、なぜこの不完全動詞や不完全形動詞というものが成立し、ここで導入したのかを説明する必要があると思う。日本祖語以降に不完全動詞が存在し、それが時代とともにその機能が化石化していき、平安朝時代には既に化石化したものがある固定した形式を取るようになった場合に、それを不完全動詞、不完全形動詞というべきなのか、または既に固定した形式としてその形態素を別個の要素として考えるべきなのかも問うべき問題であったように思う。またこの動詞の導入を是として論が進められているのであるが、西洋でも十分受け入れられているとは必ずしもいいがたいから、その説明はなおさらのこと必要であろう。この中でも不完全動詞 *n-* ‘to be’ という考え方に言及したのは Akiba-Reynolds (1984)が最初であると思うが、これは古代日本語の完了の助動詞 *nu* の活用が不完全である点に着目し、本来本動詞であったものが不完全な活用をもつ動詞へと変化したものと見ている。この点から活用が不完全な助動詞一般に敷衍すると、従来の助動詞（本書では文終止不可能接辞）として扱われてきたものは本来完全な本動詞であり、それがなんらかの理由により活用が制限を受け、助動詞となったと考えることができるのではないか。この変化過程は本来の著書の目的からは外れるかもしれないが、その点にも何らかの解説がほしかった。

また本書では「と」‘to say’を形態・統語の面から本来動詞であることを説明するために、ハルハモンゴル語の *ge-j* ‘saying’ を例示しているが、これはアルタイ系言語では成文モンゴル語の *keme-n* ‘saying’ や古代チュルク語の *ti-p* ‘saying’ や満州語の *seme-n* ‘saying’ にも同様に対応し、これらはすべて本来本動詞であったものが後に助詞的な要素に化石化した。もしこのような並行的な発達が日本語にもあったとするならば、本著での仮説が納得のいくものであると思われる。またその仮説とは別に日本語内においていわゆる「て

形」はいわゆる助詞「と」と「に」の他には動詞と形動詞にしか接続しないため、「て形」は本来動詞と形動詞の用言にしか連結しないものと仮定すると、この助詞「と」と「に」はもともと本動詞であり、その動詞と「て」が結合して「とて」となり、「に」も本来 *n-* 'to be' という本動詞と考え、それと結合して「にて」という「て形」を取るので、アルタイ諸語の 'saying' に相当する語のように、*t-*, *n-* は本来動詞であったと考えることが可能である。しかしながら、アルタイ諸語のこれらの本来動詞であった形態素がどれほど日本語の助詞「と」「に」の起源の直接的な証明になるかは疑問である。まずは上記のように日本語内での一貫した説明が可能であるかどうかを見る必要があるのではないかと考える。

第5章の2節で *preverbs* (191 頁) と *prefixes* (192 頁～) を扱っているが、ここではこの二つの要素の違いについて統語的特徴から述べられている。が、その例証がなされていないため、この峻別も明らかではない。またこの章で *suffixes* もその種類と例文を挙げているが、4章の「名詞類」には格助詞を *suffixes* として取り上げ、さらに8章では *particles* として挙げられている。一般にこの3つの章にあげてある項目は助詞としてまとめられているものが、上記のように様々に寸断されている。この点はそれぞれの名称の違いを明確に説明する必要があるとともに、その区分理由も詳しく述べる必要があるであろう。これらの助詞に関して従来のグルーピングにはそれほど大きな問題点は見られないと考える。

また格助詞を名詞類の中に取り込み *suffixes* として扱うことの利点は判然としないが、格助詞は統語的機能を有し動詞との関連がより強いと考えられるから、名詞類での扱いも不自然のように思われる。この点においてどの範疇にいれるのかは非常に難しい問題でもあることを暗示している。

第8章の助詞では詠嘆助詞として文末にくる「よ」の例をあげているが、具体的な意味・機能については全く説明がないのでこの助詞に関してはその機能は不明である。

以上大まかに章ごとに他の専門の研究者にも疑問点がなるべく分かる形で提示した。

終わりに

上記のように本書は日本語の表記の面では問題を残すが、その問題自体他に大きな言語学的悪影響を及ぼすことはないと考えられる。しかしながら、それが本書の価値を幾分でも下げる結果となっていることは否めない。その他の点においてはあまり決定的ではないかもしれないが、いくつかの問題点が見られた。

従来の西洋における文法書と比較すれば、その内容の緻密さや情報量において非常に勝っているものであり、西洋では非常に珍しく大変詳細にわたる記述がなされている点においても高く評価してよいであろう。また従来の国語学の文法記述の利点と従来の西洋での文法記述の利点を融合した点においてもほぼ成功しており、その点も高く評価できるであろう。包括的な古代日本語の文法書として最も重要なものとなっており、近代史以前の日本を研究する学徒、言語学者は勿論のこと、歴史学者、文学者に対して推薦したい書物である。

参考文献：

- Akiba-Reynolds, Katsue 1984 'Internal Reconstruction in Pre-Japanese Syntax', in Jacek Fisiak (ed.) *Trends in Linguistics, Studies and Monographs* 23, Historical Syntax, New York: Mouton publishers, pp.1-23
- Frellesvig, B 1999 'A Common Korean and Japanese copula', *Journal of East Asian Linguistics*, 10.1:1-35
- Itabashi, Yoshizo 1988 'A Comparative Study of the Japanese Accusative Case Suffix *wo* with the Altaic Accusative Case Suffixes', *Central Asiatic Journal*, No.32:3-4 pp.193-231
- Itabashi, Yoshizo 1991 'On the Origin of Japanese Genitive Case Suffixes **n/na/no₂/nga* and the Old Korean Genitive Case Suffix **i*', *Central Asiatic Journal*, No.35:3-4 pp.231-278
- Alexander Vovin 2003 "A Reference Grammar of Classical Japanese Prose"
London and New York :Routledge Curzon : xviii + 476 pp
- 姚艷玲 2003「日本語「ヲ格＋移動動詞」構文の成立要因についての一考察」
日本社会言語科学会予稿集

ABSTRACT

'On Alexander Vovin's A Reference Grammar of Classical Japanese Prose'

key words: synthetic, descriptive grammar, imperfective verbs,
classical Japanese, cognates

This paper is a critical review of Alexander Vovin's A Reference Grammar of Classical Japanese prose in the Heian period. This book is featured by a synthesis between traditional Japanese linguistic(=kokugogaku) description and traditional Western linguistic description, and also by the additional linguistic information: its writing system & phonology, its lexicon such as Japanese cognates with Korean and Altaic, and its loanwords.

There seem to be some problems on new categorization of traditionally- fixed elements in kokugogaku such as particles, suffixes & prefixes. Some explanations on newly introduced words and additional functions of some case particles are needed to understand his classical Japanese grammar

Although these minor problems are detected, I value his book as one of the most important linguistic works on classical Japanese grammar in not only the Western but also Eastern academic world of Japanese linguistics.